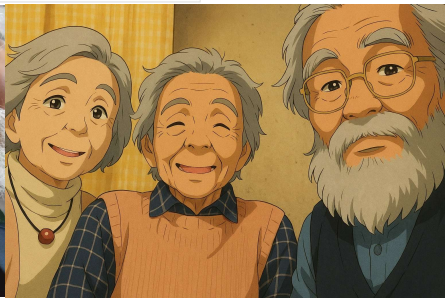
白金葭

THE
SHIROGANE
YOSHI

璃子さん宅にて（2025. 5. 30）



仝左のジブリ画像

藤田良範陶芸作品　光波

蓮池の縁の白金葭

藤田良範陶芸作品　朋友

蕺菜（しゅうさい）や殺人ニュース又流れ　　璃子（穴まどひ平 21）　高志選
三四郎池をせばめて梅雨芥　　〃　（　〃　）　〃
風呂屋あり質屋ある町梅雨半ば　　〃　（　〃　）　みち選
三伏の犬虚に吠えて昏れにけり　　〃　（　〃　）　〃

令和７年（2025）　６月号　１６５号

定例句会（7月の兼題：目高、七月）
七月十八日（金）アビスタ第三会議室 12～15
八月は休み
九月十九日（金）アビスタ第三会議室 12～15
6月句会（'25／6／20（青田波、梅雨）太字は当日句

光成高志

青田波耳を澄ませばさら〳〵と
コキア坊主一劃占めて黄緑に
遠筑波見えて楽浪（さざなみ）青田波
優先席ばかり座って走り梅雨
カウンターテナーホールに響き雷ひびく
緑陰やベンチ弁当早や時間

光みち

青田波波音立てゝそも流る
沼尻や田んぼ広がる青田波
梅雨入や呼べば鳩くる昼餉時
そこここにあさざの咲いて日の真下
塩辛とんぼ橋ゆく吾に突進す（〃）
立葵農家の庭の奥深く

浅野正美

梅雨前に庭の草取り精を出す
梅雨入りや紫陽花愛でる傘の列
青田波風吹き抜けて道作る
伸びた枝切りつつ探す梅の実を
梅ジュース美味しくなれと瓶を振る
車窓より広がる田圃青田波

佐々木由紀子

さやさやと風に吹かれて青田波
早苗田は等間隔に植えられて
早朝の澄める水田の早苗かな
成長の半ばの青田風渡る
アマリリス我をささえて写りけり
青田行く風に吹かれて歩みたり

山下寿幸

青空に風路通り青田波
トラックに荷と人乗りて杜氏帰る
烏賊吊し潮風任せ鷗跳ぶ
菜の花や「虹の松原」青き海
梅雨空に色付く梅を籠に入れ
手賀通りフロント先に夏燕

山尾万世遊

抱き返す叔母の真珠や青田波
ピンヒール強請ねだりし叔母の梅雨銀座
スラックスに線出ぬティーバックを梅雨の叔母

仕舞湯へ若手中居ら梅雨の乳
昨夜芸妓へ冷酒酌みぬ朝湯坂

165号選句一覧　○字は選者の頭文字。㊙は特選

抱き返す叔母の真珠や青田波
ピンヒール強請りし叔母の梅雨銀座
スラックスに線出ぬティーバックを梅雨の叔母
㊐仕舞湯へ若手中居ら梅雨の乳
昨夜芸妓へ冷酒酌みぬ朝湯坂
緑陰やベンチ弁当早や時間
正㊙空青に風路通り青田波
トラック荷人乗りて杜氏帰る
み㊙烏賊吊し潮風任せ鷗跳ぶ
㊐正菜の花と虹の松原青き海
㊐正梅雨空に色付く梅を籠にいる
手賀通りフロント先に夏燕
正㊙寿さやさやと風に吹かれて青田波
早苗田は等間隔に植えられて
早朝の澄める水田の早苗かな
正み成長の半ばの青田風渡る
アマリリス我をささえて映りけり
正寿青田行く風に吹かれて歩みたり
寿梅雨前に庭の草取り精を出す
㊐寿梅雨入りや紫陽花愛でる傘の列
青田波風吹き抜けて道作る
み伸びた枝切りつつ探す梅の実を
㊙梅ジュース美味しくなれと瓶を振る
㊙立葵農家の庭の奥深く
青田波波音立てゝそも流る
沼尻や田んぼ広がる青田波
㊐梅雨入や呼べば鳩くる昼餉時
㊙そここにあざざの咲いて日の真下
寿塩辛とんぼ橋ゆく吾に突進す
み㊙車窓より広がる田圃青田波
㊐寿青田波耳を澄ませばさらくと
みコキア坊主一劃占めて黄緑に
正み寿遠筑波見えて楽浪（ささなみ）青田波

今年正月筑波山亀の井ホテルに宿泊し、眼下に広がる田園風景は広大だった。楽浪と書いてささなみと読むこと学習しました（正）。（ささなみは近江、志賀などの枕詞。近江の志賀地方は楽浪と呼ばれていたことから枕言葉になった。細波と同じ意味だが琵琶湖の歴史を偲ばせる効果があるので楽浪と書いたらしい（高志）。

㊐み優先席ばかり座って走り梅雨
カウンターテナーホールに響き雷ひびく

俳窓評論纂

青田波のこと：稲作の一年をみる。春の種浸し・・手賀沼縁の農家に行った時古いバスタブ（浴槽）に種籾を浸していたのを見てなるほどと思った。苗代・・今

は田植機に合わせた育苗箱で苗を育てるため、苗代は当地でも見たことがない。田植えの準備の田水引く、田水張る、代掻き、その前に水が漏れないように畦塗をする。皆季語である。私の家の前方の手賀田んぼでも畦塗機で行うので、てかてかに畦を塗る。代田に早苗を植える田植は懐かしい。現在は苗箱を機械に乗っけて田植機が植える。知人の農家はご主人が一人田植機を動かしていたが、最近は入婿さんにやらして本人は畦を付いて歩くだけだ。佐原香取神宮のお田植祭を見に行ったのはもう昔のこと。そして植田は田植が終わったばかりの田のことで苗の活着を助けるため溺れそうになるほど水を張る。この水田に周りの風景が映っているのは美しい。田植が終わったら、早苗饗という私の記憶では田植御馳走ごっそうが昔はあった。水不足は稲作にとって一番怖いことで、水にまつわる言葉が今でも季語になっている。雨乞い、水喧嘩みずげんか、水番、水守り、雨休み、喜雨は皆季語。溜池から水を引く田もあれば、当地のように地下水による灌漑ではバルブを回すだけで田に水が引ける。水泥棒や水盗む、水喧嘩は死語になった。今月の兼題は青田波、青田の緑の上を吹く風を青田風、それが波のように動くのを青田波と言って今月の兼題にした。当地は北総台地を越した風が手賀田んぼに吹き付けるので年中風が強く、日当りも強い地形にある。引っ越す前は谷津田の埋立地の西北の角地で日当りも良くなかったので、衝動的に当地を買ったのである。今は風と日当りに悩まされるようになった。青田の中での田草取りが大変な作業であったが、今は除草剤を田植の前から撒いたりして除草の労苦から解放されたらしい。新潟の六日町に田植と稲刈に10年間通って思い出を反芻していたのも今は昔になってしまった。死ぬまでにもう一度、そう合鴨農法の鴨に会いに行きたいものだ。季語の説明が蛇足つきのこんな草稿になっちゃった。秋、冬の稲作季語は次号以降に回します。

＊朝日Be版5.24のロンダ・シービンガーさん（科学史家73歳）性差分析で革新的発展をというFront Runnerが載った。世界を変えようと奔走する気骨の学者だ。「ジェンダー・イノベーション（GI）という概念を提唱したのは2005年。科学技術の研究開発に生物学的な性（セックス）と社会的な性（ジェンダー）に基づく「性差分析」を取り入れることで革新的な発展を目指す。このGIを米スタンフォード大を拠点にEU、韓国、アルゼンチン、日本と各国へ広がりアップルやグーグルなどの巨大IT企業とも連携する。なぜGIが必要なのか。例えば自動車のシートベルト。衝

突実験のダミー人形は男性をモデルにしている。医薬品の動物実験はオスが多く使われ、体の小さい女性の方が重症を負いやすかった。AIの男女を判別する顔認証は白人男性が精度99％以上なのに黒人女性は65％だった。いずれも性差に加え、人種や年齢などを考慮しなかったからだ。（中略）ジェンダー研究のきっかけは、ハーバード大大学院で学ぶ1980年代、科学史に刻まれる女性学者が極端に少ない事への疑問から。調べると「女性は脳の構造が科学に向かない」との言説が、時代が移っても形を変えてまかり通っていた。その後、別の大学で教えるようになり、出産。授乳中に哺乳類という分類名の由来が気になった。すると18世紀に博物学者リンネが、女性は自ら母乳で育てるという社会規範を強め、家庭に閉じ込める意図で乳房を示すラテン語を使って命名したと知る。ジェンダーに対する思い込みが、人間の知識をゆがめてきたのは、歴史をたどればわかる。だが、それを暴いても学者たちは賛同しない。ならば、科学に組み込まれたジェンダーバイアス（性差の先入観）をあぶり出し、すべての人に恩恵をもたらすような解決策をともに探そう―こうしてGIは生まれた。ロンダ・シービンガーさんが科学史家と呼ばれている所以は、歴史家とは単に過去を調べて書くのではなく、社会を分析し、未来を作るものと答えたからである。GIを武器に人間の多様性を無視してきた世界との決別に挑むとある。GIの対象は科学・技術・工学・数学の英語の頭文字をとってＳＴＥＭ（ステム）と呼ばれる分野です。性差とは身長・体重・遺伝子などの生物学的な性（セックス）と性別役割分業といった社会・文化的に作られる性（ジェンダー）を指しますが、いまや男女の区別だけで捉えきれなくなっています。３％がトランスジェンダーなど、男女の枠に当てはまらないというドイツの調査会社の調査結果があるとか。30ヵ国で調べた結果である。科学技術の恩恵は誰もが平等に受けられる筈。フェミニズム運動が女性の権利向上を訴えるのに対し、GIは男性を含む全ての人の利益を求めるムーブメント（運動）。（著者はハーバード大の歴史学科出身。40年前の同学科の女性教授は一人しかいなかった。科学とジェンダーというテーマに賛同する先生はいなかったが、歴史を読むことや書くこと、そして旅が好きだったので続けられた。歴史家は対象の場所へ行き、記録を学び、何かを感じ取ってストーリーを紡ぎ出す仕事です。母親業と研究職の両立は大変でしたが、一人目の息子を妊娠した時は周りに気づかれないよう、一所懸命働きました。出産後住んでいた地区は生活費が安くベビーシッターや家事を頼む人を週七日間雇っていました。今は息子二人共大学教授になりうれしく思います。以上のコメントが書かれてある。以下は筆者の感想です。このGIという運動というか、考えは

日本ではまだ根付いていない。対象がステムという分野まで広範囲、特に科学技術分野を対象にしているのが新しいのだ。フェミニズム運動がずっと前からあり、彼はフェミニストだよとかいう言葉で揶揄したり、フェミニズムそのものを分からずに使っていた記憶がある。私は中学生になった時、そういう社会の風潮を感じ取ったのか、備後弁は使わない、女性と対等に付き合う、と心に決めた覚えがある。みちさんとの結婚式の時、そういう意味の事を一夜漬けのスピーチでもってしゃべった記憶がある。忘れてはいない。みち（敏子）さんには、みち（敏子）さんの道がある、と言ったスピーチである。この記事のようなGIよりフェニミズム論の方に魅かれていたのかも知れない。）

＊廣本貢一さんの俳句・短歌を夫人の幸恵さんから姉が頂いた。詩歌集「四季彩」と名付けられた冊子である。作者の思いが色濃く出ているわかりやすい句・短歌である。氏は広島県府中市生まれ、府中高校出であるとあるので、私には懐かしい。小二の写生大会の時その高校の校庭に集まり近くの芦田川の土手に坐って写生した記憶。川の柳を描いた覚えがある。曇りの日だったので、空を鼠色に塗ったらそこがいいと褒められて入選した。中学の恩師の木村先生がそこの高校出であった。確か木下夕爾や井伏鱒二などの有名作家に並ぶ日野敬三が府中高校出であった。幸恵さんは貢一さんの三回忌にこの冊子を作られたとある。姉がこの度大分話し込まれたらしいので氏の境遇などには触れない。私は俳人なので短歌にも触れられない。俳句は私のような自然詠主体の句風と違い主観句が多いので取り上げられないのが残念。以前確か氏の句について私の感想を書いて差し上げたことがある。その記憶などからとれる句は、「妻の書の晴れの展示や文化の日」「落葉舞ふ風の形のなすままに」「風といふ形を見せて芒原」ぐらいで御免なさい。私も新聞俳句に投句したことがある。朝日・読売・日経・東京新聞であったし、時期があっていなかったので紙上で見まみえなかったのだった。

＊璃子さんより先にお宅を訪ねた折の話しの延長（敷衍）にて、俳句朝日（平成８年（一九九六）三月号を頂いた。私が山口誓子門であることをご存知なので、その特集号をお送りくださったのである。誓子先生は平成６年に逝去された。その二年後の俳句朝日特集号ということだ。前年の平成七年に阪神淡路大地震があって誓子居も被災した。私は地震被害調査にかこつけて誓子先生宅を訪ねた。誓子先生が俳句の選をされていた座敷に上がり座卓に座ってみたことがある。地震で門柱は倒れていたが数寄屋造りの家は殆ど無傷で誘蛾灯のある家に入れたのである。こうやって自分のことを書いてしまう。蛇足。俳句朝日の誓子特集には誓子先生の写真、松井利彦の誓子百句解説、塩川雄三の心豊かな俳人誓子のエッセイ。私が注目したのは、辻田克己のもひとつの貌の文章である。生前の最後

の句集「紅日」に見られる誓子晩年の特質に触れた文章である。自然観照の極致、厳粛性などの句群に見えにくくなっている滑稽・諧謔というか遊び心の見える句。「風倒の稲穂右巻き左巻き」（昭和55）「製紙煙霞に白き手を挙げる」（〃61）「貴婦人の黒スカートの黒金魚」（〃）などが厳めしさの膨大な山の陰翳に目立ちにくくなっているもう一つの貌ではないのか、という締めの文。私の誓子選の「黒金魚より琉金に目を移す」（平4）もその傾向の句であったのだ。亡くなられて弟子が編んだ最後の句集「大洋集」を私はもっている。この中には辻田さん指摘の句が普通に載っている。敢えて例示しないけれど、俳人誰でも長く句作をしていると、作り方は変わってくる。それも長くやっていると自覚できる。芭蕉だって、最晩年のそう大阪にて病臥している時の句は、近代的つまり実存的句になっていると思う。「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」という病中吟が。芭蕉の終焉の元禄七年十月十日の夜のことは以前（平成28・9.15）に書いたことがある。芭蕉の軽み以後のおそらく最後に書くのでここでは触れない。

＊朝日俳壇6.1にうたをよむ　小倉蒼蛙（73）の俳句という題にて俳壇担当の西秀治氏の記事が載った。小倉蒼蛙は俳優で俳人で第4句集「優しさの手紙」を出したので新聞社の担当の方が氏を紹介する記事。最近ではNHK朝ドラ「あんぱん」にも出ているとか。俳人としては2023年に俳句結社「あおがえる」創刊主宰になっている。山田太一さんサヨウナラのまえがきを付けた句集である。「優しさの手紙を今も冬あたたか」。俳優の追悼句がいくつも収められている。丹波哲郎さんに「霊界に色無き風は吹きますか」。市原悦子さんに「よく通るまたねの声や冬の雲」。本人の「舞台より平素が大事立葵」。3年前に肺がんが見つかった。告げられた余命を過ぎた今、「杖をもて通院の手の悴みぬ」など飾り気のないまっすぐな句の数々はじんわりと心にしみてくる。「あおがえる一歩を何処に向けようか」で終わっている記事。6.2にお便り広場の璃子さんの手紙にあるような電話を頂き、小倉一郎（蒼蛙）の手書き特別作品30句のコピーが送られてきた。このコピーを得るまでの顛末は手紙にある通りです。ほんとにありがたいことでございます。冒頭の作品「印泥に油を少し秋更くる」をまず頂きます。「溝氷のゆふべ吹きたる風の跡」は薄氷の表面に残った風紋を詠われた。こういう自然を写生した句を私はとります。「凍蝶の草書のごとく吹かれけり」、「武者人形少し長目の顎の紐」。上の武者人形の句、私は以前家の武者兜を見て作句した。「武者兜朱の顎紐を長垂らす」（平3高志）。武者人形は高価で義母ははは買ってくれなかった。ここで余計なことか

と思いますが、私は作品本意に選んでいます。何かのご縁があるとか、この世の関係を配慮して選句はしません。誓子先生の選句精神をまねしているのです。

＊5.28朝日夕刊に高山れおなさん（56）句集「百題稽古」を刊行したという記事。和歌の古典で詠まれた題をそのまま使った題詠300句からなる。璃子さんを訪問した時に「こんなのどうなのかしら」という言葉と共に頂いた。私にはこういう句は手に余るが簡単に紹介する。「我が狐火こいも霜夜は遊べ狐火きつねびと」は忍恋しのぶこいの題で詠んだ一句。恋を孤独の火、つまり自分一人の中で燃えている火と表現し、冬の季語狐火を合わせる技巧を凝らした。「鏡花幻稿総紅玉るびや蔦嵐」は、蔦の題にて詠んだ一句。嵐の中で舞う泉鏡花の幻のような原稿が目に浮かぶ。ルビーの語源とされるルビー（紅玉）を詠みこむことで、振り仮名と宝石との掛けことばとなっている。総ルビの古い書物も想起される。「百題稽古」は「ほろかは」「永久」「六百番」の3章で構成され、それぞれ100句が収められた。平安時代の「堀川百首」「永久百首」と鎌倉時代の「六百番歌合」で詠まれた題を順番通りに使い俳句に昇華させた。なぜ、このような酔狂に挑んだのか。19歳か20歳で俳句を始めたものの、新古今集に感じていた陶酔を俳句に対して覚えたことがなかった。百首題で作れば、新古今歌人と同じことをやれると思ったというのである。（中略）刊行にこぎ着けた思いをこう語る。四季の題の始原にさかのぼりかつ四季以外の雑・恋の題も包摂して作品化した今回は、やはり必然性があった。やりきった感があり、俳人としてのキャリアにおける折り返し地点という気持もあると。俳人として心がけている原則がある。儒教の五徳である「仁・義・礼・智・信」をもじった「甚・擬・麗・痴・深」。その意味するところは？甚＝甚こってりを旨とし（味付けは濃いめに）、擬＝古詩に擬なぞらえ（本歌取りとアナクロニズム時代錯誤）、麗＝麗しきを慕い（姿は美しく）、痴＝痴おろかに遊び（中身は狂っていて）、深＝心は深く（深く生きている感じがほしい）。以上の記事を西秀治氏が書いている。璃子さんもこの記事をスクラップされていて私（高志）が来たら見せようと思われていたらしい。私はすぐは感想を述べられないのでお借りして今じっくり読みキーボードにて打ち込んで稿にした。現代短歌社からの出版であるので、新古今集が出てくるのだろう。私の疑問は和歌の古典と俳句の季語の集まりをどの考えているのだろうか？季語は和歌の歌題の俳句版の季題より増補されてなったもので生の素材である。歌題は和歌の美に合うものが長い間に選択されて来

たのに対して俳句の場合は、和歌の題材を受けついだものもあるけれども、その余りにも広汎にして無制限なる素材の世界が、整理や分類をされてできたものである。言い換えればそれはゾルレン（Sollen 当為）の意味のものと云うよりは、むしろザイン（Sein 存在）の概観をあたえるものである。つまり俳句の世界は卑俗で自由な世界に立ち、日本の風土の季節現象ならすべて取り込もうとするのである。歌のような京都を中心とする季節現象の一部だけが歌の情趣にふさわしい優美さによって歌の題に取り上げられる。そのような歌を俳句に詠んでもそれは季語を詠んでいることにならない。季語を利用して己が心の思いを陳べているのだ。朝日俳壇に自然詠が少なくなっている傾向は氏のような人事句主体の選をするからではないか。

＊朝日社説 6.12 **日本学術会議の改組**　政府の学問支配許さぬ決意という見出しにて長い社説が載った。無名の一国民の私がここに書いてもなんの足しにもならないが、研究に従事してきた私も長く注目してきた記事であつた。政府が学術会議に介入できる仕組みが埋め込まれた法律の成立である。この発端は、例の任命拒否を馬鹿な大臣が形式を逆手にとって気に食わない学者を排除したという暴挙から起こったこと。学問の自由と云うことが理解できぬ理屈に走る考えからだ。米国でも今現在そういうことが起こっている。嘆かわしいことだ。

＊朝日歌壇 6.8 のうたをよむ　写実の幻想性（川野芽生）を特に注目した。私は俳人なので短歌にはコメントはしないのですが、この中身はいい。気に入ったので紹介します。「灯さずにゐる室内に雷させば雷が彫りたる一瞬の壜」（小原奈美の第一歌集『声影記』）という短歌。待望の、という言葉がこれほど相応しい歌集も他にあるまい。端正な文語で構成される理知的な文体。鋭い観察眼に裏打ちされた写実。それが暴き出すのは、写実は極めれば幻想へ接近していくという事実である。顕微鏡が発明された時に人々を襲った驚きはこのようなものであったろうか。暗い部屋に稲光が差し込むと、置かれていた硝子壜が光の中に浮かび上がって、再び闇に沈む。掲出句が描くのはそれだけの光景だが、はっとするほど鮮やかだ。文体の緩急も見事。ゆったりとした上の句に対し、下の句は紫電一閃、歌の後に再び訪れる闇の中で反芻して、目にしたものを初めて理解する。闇に挟まれた一瞬の光と、その光のもと、エッチングのような細い線で空間に刻みこまれた透明な壜が、闇を変質させる。（以下略）この短歌の見事な写生とそれを鑑賞した右の文章も大変

見事ではないか。私はこれに魅了された。芭蕉の言葉を書き留めた去来抄に、「ものの見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし」とある句作りを短歌で言い留めたのがこの歌のようなものだと思う。私の句で気に入ってる写生句「蜷の道微粒砂動く流れあり」（R2高志）を載せました。

＊6.12 牛久の朋子さんと別れての帰途、立ち寄った以前の畑で偶然久田夫妻に会った。昔話をした中にホームページを覗いてねの言葉をもらったので開いて気に入った俳句を載せます。

ポン菓子機のバンとこだます昭和の日

母ふたりスマホに座す(おわす)聖五月

以上は2025年の句の中から選びました。（中略）そらさんの生活の全てが自身のホームページに載せられておられ、本誌で紹介するに有り余る量なので、交誼の復活ということで本誌をお送りします。

芭蕉の軽み以後（116）　光成高志

八日、月山にのぼる。木綿ゆうしめ身に引かけ、宝冠ほうかんに頭かしらを包、強力ごうりきと云ものに道びかれて、雲霧山気うんむさんきの中に、氷雪を踏てのぼる事八里、更に日月行道じつげつぎょうどうの雲関うんかんに入かとあやしまれ、息絶身こごえて頂上に臻いたれば、日没て月顕あらはる。笹を鋪しき、篠しのを枕として、臥て明るを待。日出て雲消きゆれば、湯殿に下くだる。谷の傍かたわらに鍛冶小屋と云有いうあり。此国の鍛冶、霊水を撰えらびて、爰ここに潔斎けっさいして剣つるぎを打、終ついに「月山」と銘を切て世に賞せらる。彼かの竜泉りょうせんに剣を淬にらぐとかや。干将かんしょう・莫耶ばくやのむかしをしたふ。道に堪能かんのうの執しゅうあさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋て、春を忘れぬ遅ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花ばいか爰ここにかほるがごとし。行尊僧正の歌の哀も爰ここに思ひ出て、猶なおまさりて覚ゆ。惣そうじて、此この山中の微細みさい、行者の法式として他言する事を禁ず。仍よって筆をとゞめて記さず。坊に帰れば、阿闍梨の需もとめに依よりて、三山順礼の句々短冊に書。

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峰いくつ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山銭ふむ道の泪かな　曾良

曾良日記によれば実際に月山に登ったのは六月六日のことで、七日に湯殿山に行き、その夕刻に南谷に帰っている。八日には、南谷で休養した後精進に一日を送っている。八日月山にのぼると二日ずらしたのは月の山である月山にたいして月をできるだけ大きく印象付けるために宵月の最も遅い日を選んだという配慮からとも考えられる(栗田勇著)。目黒野鳥編では六日の誤りと一語で

済ましている。「木綿ゆうしめ身に引かけ」のしめは注連のこと。麻を編んで作った修験袈裟。山がけをする者は、潔斎中から下山後の精進おろしまでこれを襟に掛ける。芭蕉の頃は紙縒りを麻の代わりに用いたといわれる。「宝冠」は頭を包む白木綿ゆう。長頭襟ながときんともいう。修験者の姿は写真を載せれば百聞は一見に如かないのであるが、文章で書くとこうなる。髪をそらず、半僧半俗の姿に兜巾ときんをいただき、篠懸すずかけ・結い袈裟を掛け、笈おいを負い、念珠や法螺ほらを持ち、脛巾はばきをつけ、錫杖しゃくじょうや金剛杖を突いて山野を巡る。芭蕉の文章も宝冠に頭を包み、強力というものに導かれてとあるように、現代の登山の様を想像してはいけない。ここは『奥細道菅菰抄』を参照するのが一番正確である。月山、湯殿に登るは、潔斎修行（酒肉の飲食その他の行為を慎み、沐浴もくよくなどして心身を清めること。）せざればゆるさず。当山へ登る人、潔斎中より下山まで、白木綿ゆうを襟に掛る。（中略）強力は、修験の弟子、笈など負せて従はしむるもの。即ち登山の案内先達なり。故に先達とも云。日月行道じつげつぎょうどうの雲関うんかんに入とは、詩に平歩入二雲霄一、と云が如く、高山にのぼるさまを、雲をしのぐに喩ふ。雲関は、道家の説に、天上六関など云事あり。〈事繁き故にこれを記さず〉没ハ、ヲツルトモ、シヅムトモ訓ズ。日没ハ、日ノ入ル事ニテ、仏家ノ六時ニ、日没時アリ。晩暮ヲ云。実際には『曾良日記』に「申ノ上尅こく（午後三時四十分～四時三十五分頃）、月山ニ至」とある。日月行道に対応している。曾良日記にあるように、今みたいにバスで八合目までさっと登れるわけではなく、裾野から登山しているのだ。その日（六日）は天気よく三里登って強清水（四合目）二里登って、平清水（六合目）、二里登って高清水（七合目）。ここまでは馬足叶う道であった。弥陀ヶ原（八合目）に小屋有。中食ス。（是ヨリ補陀落、ニゴリ沢・御浜池おはこいけナドヽ云ヘカケル也。）難所成。御田有。行者戻リ、こや有。とあってようやく申の上刻に月山に至る。先ず御室を拝んで角兵衛小屋に至る。雲晴れて来光ナシ。（日の出の時、陽光を背にして立つと自分の影が雲や霧に投影され、周囲に紅環が現れる現象。）夕には東に、旦には西に有る由也。この後湯殿に下る。宗教に詳しい栗田勇著では出羽三山の歴史を詳しくコメントされている。出羽三山を開いたのは、三十二代崇峻天皇の第三皇子である蜂子皇子（能除大師）とされている（先月既述）。出羽三山は、古来から山岳信仰によって仰がれてきた。月山は天照大神の弟神の月読命つくよみのみことが祀られている如く。このような山岳信仰は、奈良時代になると、密教や道教、儒教に影響された仏教者が、修行の地を求めて山岳に入るようになると、様相を変えて神仏が渾然一体となって定着す

る。その根本思想は、神は衆生済度のための姿を変えて現れた仏であるという本地垂迹説である。ここで思い出したので月山高原ラインをバスで弥陀ヶ原まで登った時のことを書いておく。月山は1984mの高嶺だが、八合目の弥陀ケ原はそれより500m下の傾斜がなだらかで湿地帯。中に池塘と呼ばれる沼が散らばっている。立山の途中にも弥陀ケ原があり池塘もあるので親近感があった。二時間ぐらい時間があったので、木歩道を歩いた。震災後だったせいかお宮さんに沢山の卒塔婆がたてられていた。「丈短き夏草靡く弥陀ケ原」「老鶯の語尾のちょん切れ八合目」「池塘ありその真中に藺草立つ」「池塘遠近おちこちニッコウキスゲ黄の点々」「池塘に毬藻水面に水澄まし」「笹竹の筍貰ふ木道に」「青山へ　尻突き出してバス駐車」「夏雲雀月山八合目晴れて」などの句を書きとめた。みちさんの句は、「二合目に入り山毛欅ぶなの道青葉闇」「夏蕎麦の花咲く月山前にして」「月山に池塘のありて蛙鳴く」「夏の雲映る池塘の四十八」「老鶯やゆく先々の池塘群」「月山はすでに秋風雲流れ」などの句をもらった。

お便り広場

　光成様いつもありがとうございます。17部お送りします。「短詩のひろば」へのご投稿も重ねて感謝いたします。みちさんによろしくお伝えください（5.20木戸敦子）。

　前略　もう少しで梅雨入りですね。野球が始まり楽しみが増えました。今頃です。白金葭ありがとうございました。廣本さんにもすぐ届けました。お元気でしたよ。たいへん喜んで下さり一時間も話して帰りました。お孫さんの結婚式があり出席されたとの事でした。タブレットでの写真を見せてもらいながら主人を亡くされた二人の息子さんを東大を卒業させられ涙あり笑いありのすばらしい式だったと話されました。貢一様の三回忌に詩歌集を作られたそうです。私にもくださり高志さんにも届けてくれとくださいました。お送りします。カレンダーのは私毎年もらっていたのです。高志さんに見てもらうのは恥ずかしいと言っておられました。貢一さんも戦争で父を亡くされ母一人子一人での家庭で育ったと聞いています。貢一さんのお母さんと私は良く話していました。主人を亡くし子を育てた母としていろんな話が出来ました。お身体大切にがんばって下さい。無理をせず元気でいましようね。草々（5.27幸子）。（手紙によると、幸恵さんのお孫さんは東大卒の秀才だったのですね。幸恵さんのご主人は私らの二従兄弟ふたいとこのミサ子さんと同じ境遇の家庭に育ったのですね。またご主人のお母様と幸子姉はよく話をされたというところ大変親近感を持ちました。手元に平成十二年（二〇〇〇）に頂いた幸恵さんの達筆の手紙をもっていたので又読んで、そうだ幸恵さんにも差し上げよう、と思い衝動的にお姉さんに頼みました。次回からは直接幸恵さんに送りましょう。次の手紙の朋子さんのように句は作らない

けど毎月読みたいので送って下さいと頼まれました人を誌友と言います。幸恵さんも誌友になってもらうように本誌でお願いします。高志）　光成高志様　敏子様　木々がまぶしい季節がまた廻ってきました。お変わりなくお過ごしでしょうか。四月に長沼りんご園でお会いしてから一か月以上がたちました。牛久でりんごの花を見たのは初めてです。良い機会をありがとうございました。つぼみの時は先がピンク色、花をさかせると真っ白い花びらでやさしく可愛い花に見とれてしまいました。持参のコーヒーまでごちそうにしていただき楽しい一時でした。文学焼きは大好きです。我孫子で敏子さんとお仕事をしていた時代を思い出しながら味わいました。いつもお気遣いを頂き恐縮しております。白銀葭３月号ありがとうございました。拝読しながら、句は作らないけど、楽しみにしている思いに気づきました。五月は、夏日だったら涼しかったり着る服が違って体調管理も大変だったことでしょう。お時間ができましたら牛久においでください。無理なさらずにお体を大切にお過ごしください（5.30朋子）。（右のはがきを受領、そして誌友になって下さいましたので本誌を毎号お送り致します。俳句というのは、季節を表す言葉すなわち季語があり、季語を入れて五七五と整えた短い文章すなわち詩うた、すなわち俳句にする、俳句を作る、創作する結構頭を使う活動です。ご存知のように、季語は時候・天文・地理・生活・行事・その他動物・植物にわたり殆ど生活の全てのものを包含します。最近私が思うに、手紙やはがきのような書簡は身の回りのことを文章に組み立てゝいるわけですから、俳句の前段階の創作活動であって広くとれば文学です。即ち学問ですので、俳句に限らず文章にして送って下されば本誌に掲載する価値があるのです。そのように思えるようになりました。俳句を作るのは難しいと思われても、日々の生活、日々の出来事、思いをハガキにするのは私に言わせれば散文ですから、気楽にできると思います。そうすることにより、仲間内ですが心の交流が出来ます。交誼を結ぶことが出来ます。手紙を掲載されるのは恥ずかしいとおっしゃる方もおられますが、どうでしょうか、自分の書いたものをもう一度本誌で読めるのは牛がするような反芻をすることで沈思黙考が出来る楽しい時間が持てるということではないでしょうか。私なんか本誌を発行したら何回も読んで反芻しています。そうしているうちに次号に書くことが浮かんで来ます。後は後記をお読みください。高志）。電話は時に暴力と思いつゝご多忙の中おしゃべりお許しください。その前に五月三十日にお揃いでご来駕沢山のおみやげ迄頂きありがとうございました。先年はやったお、も、て、な、し、もできずまた〳〵のろ〳〵をご披露してしまいました。みち様には食器洗いまでおまかせし申し訳なくお詫び申し上げます。おかげ様で楽をさせていたゞき感謝しております。高志先生の畑のもの新鮮で美味しくどちらかと云うとビーガン系完全菜食主義

なので嬉しく頂戴しております。遠路お越し下さいましてお荷物沢山雨しょぼぐ〜でさぞやお疲れの事と拝察、何もかも不行届お詫び申し上げます。白金葭毎月発行迄大変、お続けになるのはまたとても大変なことですのに句会も吟行もよくなさるのに驚きです。自然に恵まれた我孫子にお住まいも畠作りをなさる土もありうらやましいかぎりです。私は年と共によろず退化して昔出来たこともしたいこともたゞぐ〜日常を生きるために必要なことしかもその一部しかできません。つまらないこと書き連ねてもいたし方なく、先日の私の様子ごらんになってお解りと存じいましばらくおつきあいくだされば嬉しく存じます。「俳句朝日」は何となく創刊号が手元に残り三年後に山口誓子の特集がでている一九九六年三月号もありましたのが不思議です。光成家には沢山の誓子先生の句集などおありかと存じましたがいかがでしょうか。廃用症候群はそろ〜目もチカ〜何をかいているか解りませんので、この辺で失礼いたします。小倉蒼蛙氏の三十句やはりコピー機も近頃はフクザツで自分ではうまくできないのでコンビニの方に恥をしのんでコピーしてもらうことにしました。「原稿紙に自筆」をやはりお目にかけたくて梅雨近く健康被害にお気をつけてすてきな白金葭の表紙と中身をお作り下さいますよう。お体大切に‼♡高志

先生みち様　璃子　お二人を存じ上げ夫婦のカタチと云うか何か理想的カップルと云うか結婚し万人がお二人のようであればすばらしいと思いました。「朝刊のしめりて梅雨の萌すかに」（璃子）

手近のこんな紙でヨルヨナカにお手紙書いたのに六月五日にみち様のおはがき落手嬉しくありがたく。やっと紆余曲折の末レターパックライトを手放すに至りました。昨今のコピー機は簡単に行かずやっと四日にコンビニのお姉様にコピーしてもらい、やれ〜と思いましたら、一枚コピーもれ、本日（6.5）ヘルパーが来たので一枚だけ取ってもらうつもりがNGでした。事業所の上司にれんらくの上の返事でした。私は要支援、介護ではないので今迄台所の床拭き湯殿の清掃以外何一つ頼んでもいないのに、こんなものかと思いました。そこでみち様のカンパニュラの御絵で「いかり」を納めみずからコンビニで一枚コピーしてきました。コンチキショー、バカヤロ、スットコドッコイ、バーカ、罵詈雑言は自分に向ってしようね。（6.5璃子）（璃子さんの手紙はリアリティがあって非常に面白いです。俳句を長年お作りになっておられるのでこういう状況描写が正確、お考えもよくわかり余韻が豊かでほんとにおもしろい。キーボードをたたいていて楽しくなるのです。以前宮沢賢治論を書いて下さった武者昭七さんの原稿を打ち込んでいる時と同じ楽しさです。高志）6月の投句いたします。春に梅の花が綺麗に咲いたので実の収穫を楽しみにしていましたが3個しかとれませんでしたが梅ジュースを飲めるのを楽しみにして

います（6.15正美）。光成さんいつも白金葭送付頂き有難うございます。5月号に記載されています、芭蕉の行き先でのいろいろな人との、出会いを良くわかりやすく表現されていますね。今後の行き先を楽しみにしております。6月の投句を以下の通りお願いいたします。宜しくお願いいたします（6.17寿幸）。光成高志先生みち先生　いつも大変お世話様になっております。誠にありがとうございます。先には吟行して頂きまして誠に誠にありがとうございました（6.18由紀子）。

我孫子日記

	5/16 句会
	5/17 コンサート印西
	5/22 光会
	5/23 auスタイル↔JH
*1	5/24 駅前ｸﾘﾆｯｸ
	5/26 こやの皮膚科
*2	5/30 璃子さん宅訪問
*3	6/6 駅前ク→朗読会
*4	6/8 清水公園花ﾌｧﾝﾀｼﾞｰ
*5	6/12 ねんど会（牛久）
*6	6/18 浜離宮朝日ホール
	6/20 句会

*1 見上げたる欅若葉のトンネルを
*2 梅雨寒や電車混み合ひ人の息（みち）
塀際の下野草の花盛ん
その裏の庭の隅には七変化
餌を啄む番（つがひ）で来たるぽっぽちゃん
青梅雨や曲り角まで手を振って
梅雨入や見送られては振り返る（みち）
*3 右左青の一面青田波
青田波葉裏を見せて波となる
*4 薔薇の門アーチの所まで伸びず（みち）
花ファンタジーペチュニアの大花壇
学童のやうなコキアの背列す（みち）
黄の薔薇は遠目に目立つ花畑
蓮池の一画白き花睡蓮
睡蓮のかたまつて咲く池の隅（みち）
蓮池を縁取る緑真菰原
一群の未央柳の花咲ける
曇天にそびえ立つかに夏柳
対岸の高き青柳くつきりと（みち）
真菰原越しに白金葭が見ゆ
あさざ咲く黄の点々と沼縁に
八橋の蓮の大葉に阻（はば）まるゝ（〃）
青蓮の沼を隠して盛り上がる（〃）
蓮池の蓮の葉一面巻葉立つ
しもつけの花に仕切られ藤見台
半夏生草壁状に生（は）へ池隠す（みち）
*5 梅雨晴やマリンブルーの名は光波
陶芸のコバルトブルー梅雨晴間（みち）
朋友やおしどり夫婦青岬
青葉して皇帝ダリヤ茎も青
藤田邸辞する時鳴く時鳥

*6ギター弾く右手振動青田波
歌声はホールに反響はたゝ神

編集後記

本誌は俳誌ですが、文章なら何でも受けることにします。お便り広場の投稿を歓迎致します。俳句に限らず、何のテーマでもどんなエッセイでも、どうか一度試し投稿をしてみてください。もともと創刊時からそのような趣旨で編集をしていましたが、今月改めて13頁の朋子さんの便りをキーボードに打ち込んでいて思ったことです。鉛筆の指で紙に書いているときに思い浮かぶ考えが今はキーボードを打ち込んでいるときも指先から頭に伝わるような感触があります。私の文は難しい難しいとよく言われるのです。それは書いている内容が難しいのであって、私の所為ではありません。芭蕉の軽みという意味を考えるだけでも難しいのです。常に実在の方が難しいのです。人生という実在、実際あることが第一、難しいもんではないでしょうか。それでできるだけやさしく書こうと思っていますが、私自身がよく分からないことを先人の書いたものを引用したりしてそれをやさしく翻訳せずに掲載するからでしょう。ＮＨＫのラジオに子供用のニュースと称してやさしくしゃべっているのがあります。言い回しはやさしいけれど内容は難しいものがほとんどです。ハマスだ、イスラエルだという戦争なんて言うものだってやさしく言えるけれど何故そう云うことが起こっているのかなどをふれると途端に子供達には無論私たちにも難しいです。こういう風に打ち込んでいるうちにどんどんどこかへ焦点が行ってしまい、決まったレールを外れて脱線するし、余計なことだから蛇足だと思ったりいや大切なことだと思ったりで、文がすぐ発散してしまうのです。しかしそれが現実だからそういう心の動きでも日常ある事ですから、文章にしてここに残しておけばそれがその時の人生の一齣なのだから、切り捨てなくていいのだと思うようになりました。以上が先に書いたお便りをお願いする趣旨です。

白金葭6月号（通巻165号）誌代一部千五百円（年会費一万五千円）郵便振込口座一〇五二〇―四二一三六一名義シロガ　ネヨシ令和七年6月22日発行　編集発行人　光成高志　発行所　〒270-1119我孫子市南新木2-14-17光成方　投句先：メール又はライン又は手紙・ハガキ）印刷製本喜怒哀楽書房〒950-0801新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊三＆璃子さん訪問時の自撮り写真全ジプリ画像。藤田良範陶芸作品＆清水公園の蓮池の白金葭。「穴まどひ」（璃子句集）より選句。